5　三郷

三郷は安曇野市の南西部に位置し、黒沢川扇状地と梓川の河岸段丘によって形成されている。地域の約３分の２は山地で、平地の西側はリンゴを主体とした畑、東側は水田が広がっている。三郷には東傾斜の田園風景の中に屋敷林が点在し、集落内に多く残る小さな路地とともに独特な景観を形成している。

5-1 住吉（すみよし） みどりと歴史・文化に触れ合う屋敷林

安曇野市三郷温

再生された神谷宅と屋敷林

度重なる道路拡幅後も生け垣と屋敷林が美しい通り

道路拡幅は松の木を残して東に広がった

住吉は江戸初期の元和元年（1615）に開発された新田村である。中世住吉庄の久木集落がおそらく黒沢川の洪水によって退転していたところに、天正年間（1573～92）武田氏の手による町割りが行われ、元和元年の新田開発により村として成立したと考えられている。

現在、黒沢川は住吉神社の南西で地下に浸透して河川敷が消滅した尻無川になっているが、かつては住吉神社の南を流れて神社前で北に流れを変え、現在の住吉集落の本通りを流れ、小住吉に至っていたという。住吉集落の屋敷地は本通りよりも高くなっており、両側が自然堤防であったことをうかがわせる。住吉の町割りが武田氏によってなされたとすれば、黒沢川の治水工事と切り離して考えることはできないだろう。

集落の特徴としては成相新田宿の宿場町割に酷似した、計画的な街村があげられる。道裏に東西呑（のみ）堰、その裏に東西大堰、さらに水田を隔てて東西大境堰を通すなど、用水・地割・屋敷割が合理的に設計された様子が残されている。

何度も道路拡幅があり、美しい塀となった

本棟造の家並みと塀が連続する

珍しい石塀の家

朱塗りの正一位稲荷神社

屋敷と塀からは歴史を感じる

住吉上手の道祖神

昭和63年（1988）、当時の三郷村では「住吉の家並み」を「みどりと歴史、文化に触れあうプロムナード」として、村の総合計画の中で歴史的価値を位置づけた。その内容は、多くの古い民家群が南北に一直線に走る中道（かつての県道）の両側に整然と並び、石垣や生け垣で区画され、それを取り巻く古木の屋敷林がうっそうと茂る景観は他地域にはない、というものであった。しかしながらこの価値観も、時代の変化とそこに住む人々の要望によって、平成10年（1998）に道路拡幅工事が行われ、旧家並みの様相は一変した。

神谷家の屋敷林

神谷宅でも旧道路沿いにケヤキの大木でうっそうとしていたが、伐採され西側のマツの古木を残すため現状となる。母屋は本棟造、安政年間（1854～60）の建立、建坪120坪。10年前に補強工事と併せて改築再生した。敷地は600坪（約1,980平方㍍）、母屋前には前庭と庭園、一角に洋風庭園、生け垣を境に南側にカキが植栽され、付属建物・土蔵・駐車スペースに分けられている。屋敷林の手入れは年２回している。

5-2 上中萱（かみなかがや）　義民の里の屋敷林

安曇野市三郷明盛

宮澤家住宅の屋敷林

緑の小路

宮澤家住宅の母屋

中萱は、旧三郷村の北端、水田が広がる梓川左岸扇状地の扇央に位置し、常念岳の美しい山容を望める地にある。

中萱という地名の由来には、中界（なかがい）（中萱熊野神社由来記）と中小屋（なかごや）（中世領主の屋敷）の二説がある。

明暦３年（1657年）中萱堰が開削され、当地だけでなく周辺地域の新田開発が飛躍的に進んだ。上中萱と下中萱のそれぞれに庄屋と組頭が置かれ、独立した村の機能を果たしていたが、幕末に至るまで中萱村として一つの村を形成していた。

義民の里

上中萱村は、貞享３年（1686）の貞享騒動の首謀者・多田加助の居住した地で、堀と土塁の残る屋敷跡が「多田加助宅跡」として県史跡に指定されている。同地には、加助ら義民を讃えた貞享義民社（加助神社）が建てられ、一揆の同志28名が祀られている。また、当社の南方にある貞享義民記念館「義民の里」には、貞享騒動の資料が数多く展示されている。

宮澤家住宅

中萱駅から県道を西側へ進むと、国の登録有形文

道祖神と石塀の中を抜ける千国道

貞享義民顕彰慰霊碑（貞享騒動 300 年記念・昭和 61 年建立）

白壁と屋敷林の住宅

本棟造の住宅と屋敷林

化財に登録された「宮澤家住宅」が目に入る。母屋は昭和11年（1936）の建築で、木造二階建の入母屋造。立ちが高く、軒の出も深く、重厚な外観を呈する。座敷まわりの欄間彫刻も見応えがあり、二階の32畳の大広間は、公私にわたる接客場として使用された。昭和戦前の和風建築の一典型といえる。また、母屋だけでなく屋敷内の土蔵や石塀、門なども文化財に登録されており、屋敷全体からも昭和初期の住まいの雰囲気を見せている。

敷地の南側には、ヒノキを中心とした中高木が植えられており、庭園を引き立てている。

5-3 下中萱（しもなかがや）　千国道沿いの屋敷林

安曇野市三郷明盛

歴史を感じる道沿いの家並み

白壁の土蔵が美しい

この地域の塀にはデザインの共通性を感じる

中萱の文献上の初見は、文明８年（1476年）の諏訪下社文書である。中世には上・下中萱を古道の千国道が南北に通過しており、史料からはここに定期市の六日市場が開かれていたことが想定され、人々の往来が多かった地域と考えられている。

千国道は、越後との交易の道として古くから開かれ、江戸時代には小谷村千国に番所が置かれたことから千国道と呼ばれた。中世の千国道は、安曇野に入ってからは５本に分かれ、中萱地域には西の山麓から数えて３本目と４本目の２本が、ほぼ平行に走っている。

特に西山山麓から４本目の道は、下中萱村に六日市場を形成し、集落の発展を促した。これらの千国道や、集落を東西に横断する松本道や日光寺道（烏川山道）は、松本が城下町になり繁栄した近世に入ってから、よりその重要性を増してきたといわれている。

現在これらの古道は、道路改良や構造改善などにより、ごく一部を除いて原形をとどめていない。

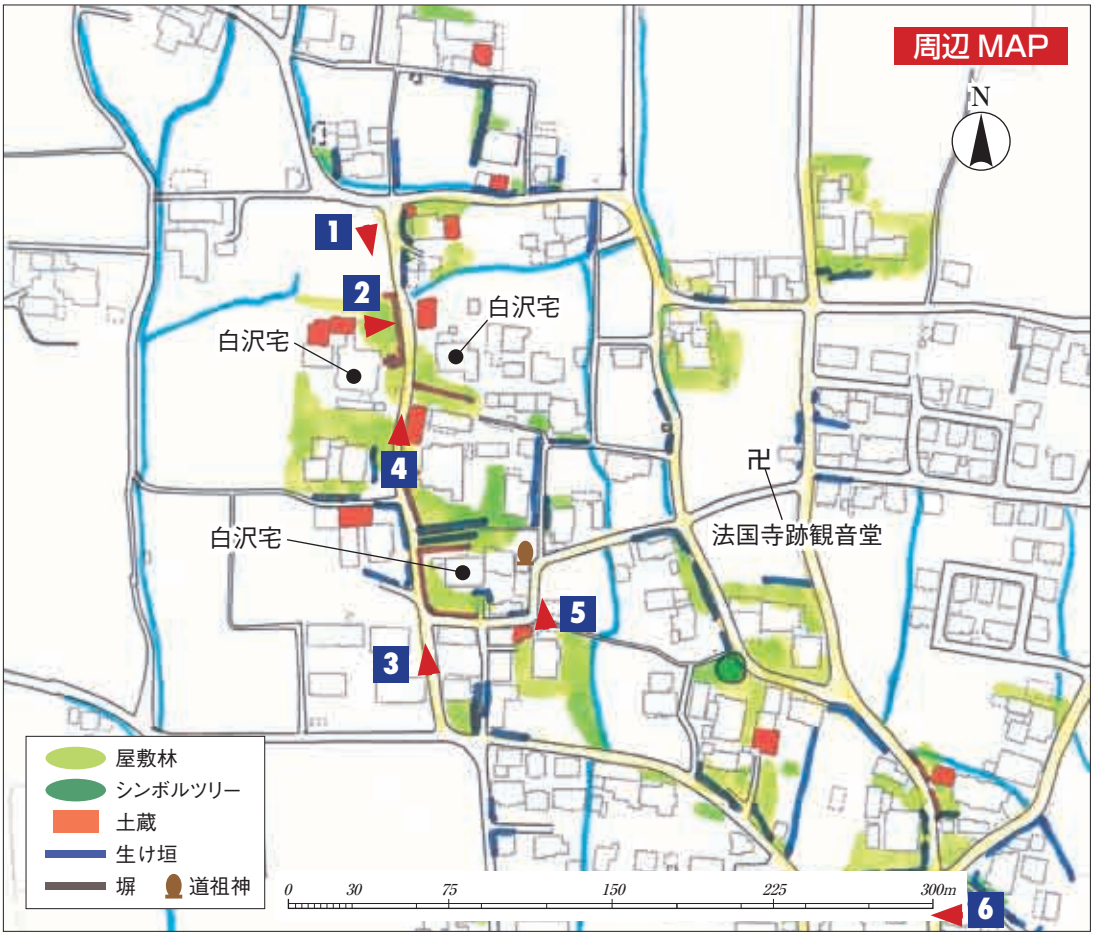
両脇に石垣の塀と屋敷林が続く

下中萱の道祖神と二十三夜塔

稲荷大明神

下中萱の屋敷林

昭和20年代の下中萱集落には、本棟造や茅葺の建物が多くみられたが、現在はわずかしか残っていない。中萱地区は、屋敷林としての役目をもっていた樹木を庭木として活用しているため、高木の樹木は比較的少ないが、沿道の源氏塀や石垣と調和した落ち着いた沿道景観をつくりだしている。



5-4 及木（およびき）　歴史をつなぐ屋敷林

安曇野市三郷明盛

岡里宅の源氏塀と高山宅の屋敷林

岡里宅の屋敷林と本棟造の母屋

白壁の土蔵が並ぶ小道

及木は、三郷地区の北東に位置し、梓川扇状地と黒沢川扇状地の複合扇状地の扇央を占める。位置関係からして、平安後期に成立した住吉庄の中心集落の楡から分離独立した集落と考えられる。及木の名は、神事に使う麻などをゆでる「ゆびき」から転じたという説や、堰の水量を調整する枠木に由来するという説などがあるが、分からない。

天文14年（1545）の小笠原長時の代の分限帳に「旗本鑓備（やりぞなえ）衆十九家」のなかに「及木孫七」が見える。中世にここを本拠とした小笠原配下の及木氏がいたらしい。西村の堀屋敷はその居館であったようで、小規模ながら周囲は角川と西川が取り巻く城下集落を形成している。

また、武田氏滅亡後に深志城を回復した小笠原貞慶は、及木源三郎に氷室の地32貫文分をあてがっている。この及木氏は東村にある堀屋敷に居住していたとされる。

江戸時代は庄野堰の枝堰の及木堰の掛かりで、流末のため水不足に悩まされたようである。楡・住吉・及木の三か村はともに住吉神社の氏子として奉

及木西村の通り

西村薬師堂前の道祖神

堰が西村の集落を巡る

土蔵の正面デザイン

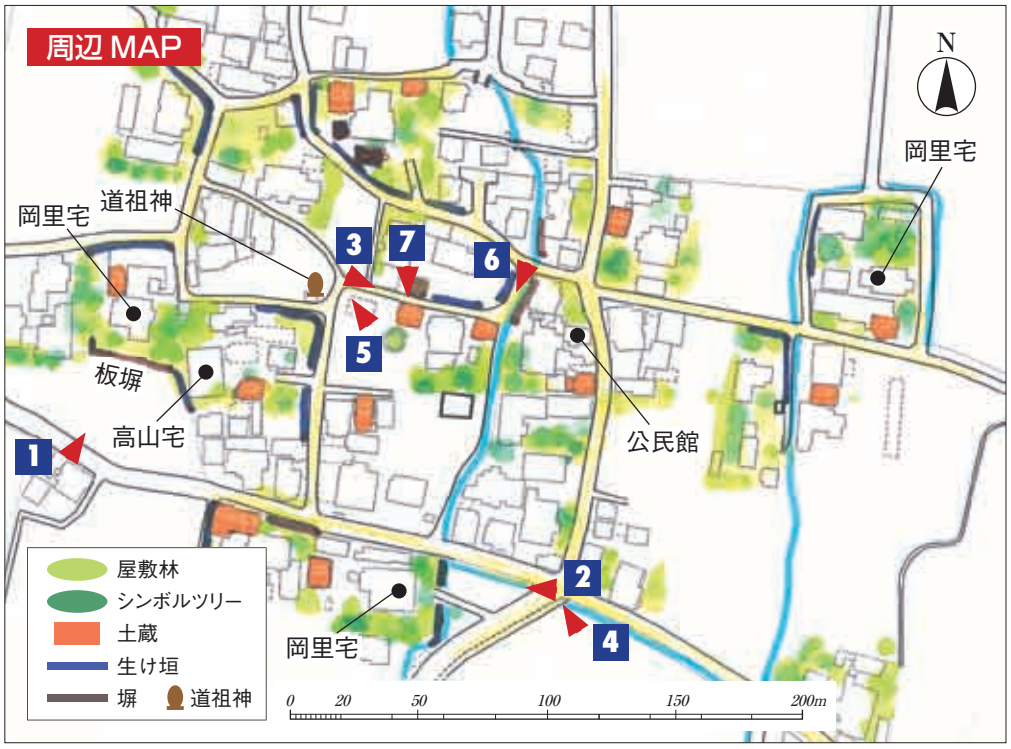
生け垣の美しい福島宅

仕していたが、明治13年（1980）に及木は氏子から分離して、伍社宮を分祀して鎮守とした。

明治に入り周辺の村と明盛村を構成し、昭和戦後三郷村となった。

及木の屋敷林

及木は西村（本村）・東村・北村の３集落からなる。その中でも中心をなす西村は、堀屋敷を囲んで城下集落をなしている。そのため屋敷林が集落全体をすっぽりと包み込むように発達しており、遠くからは田圃の中に浮かぶ城塞のように見える。反対に集落の中は家が集住しているものの、それぞれの境をさえぎるものは少なく意外と開放的である。



5-5 北小倉（きたおぐら）　安曇平を望む屋敷林

安曇野市三郷小倉

大滝山登山口への道がつづく

西山からは安曇野が一望にできる

八幡神社に続く小道

西山沿いの小倉地区（旧小倉村）は古くから、立地の違いにより、鳴沢沿いの北小倉と黒沢沿いの南小倉に分かれ、そこに大正時代に小倉官林を開いてできた東小倉および室町が加わった４地区からなっている。そのうちの北小倉は鳴沢川扇状地の扇頂に位置して東に傾斜し、わずかの水田のほかは集落の東に広大な畑作地帯が広がっている。

五反田遺跡からは縄文前期の住居址が見つかっているが、弥生時代以降長らくは人が住んだ形跡がみられない。小倉の初見は室町時代の長享２年（1488）の諏訪下社文書で、「西牧小倉」とあることから西牧郷に属していたことが分かる。ここを支配したのは鎌倉初頭に東信から西牧（松本市梓川上野にあった牧場）の地頭に任じられて来た滋野氏一族の西牧氏である。西牧氏は戦国末期に小笠原氏に滅ぼされるまで有力な武将であり、北小倉の小倉城も当初は西牧氏の築いた山城であったと考えられる。

天正10年（1582）武田氏が滅ぶと、小笠原貞慶が深志城を回復し、留守中に武田氏に従っていた西牧氏はこのとき小笠原氏に滅ぼされた。

本棟造と屋敷林の落ち着いたたたずまい

三階建ての繭倉は現在移築されて神奈川県で診療施設となり再生された

小倉で有名なシダレザクラ

大倉宅の西側に珍しい竹の屋敷林
屋号は「竹室（たけむろ）」である。

大倉宅は敷地の屋敷林を
活かして住宅を新築した

小倉城の麓には城下集落が形成されており、縦道と横道が整然と区画された方形町割の里屋敷となっている。また村落の東方に長大な堀跡が発見されている。これが現在に続く北小倉の集落である。

また、小倉は交通の要衝でもあり、山麓を通る中世の千国道が、北小倉の中を抜けていた。

大倉宅の屋敷林

小倉城直下の八幡神社から東へ伸びる沿道にある大倉宅には、イチイなどの生け垣越しにスギやヒノキが数多くみられる。また、竹藪が他の集落に比べて多く見られるのも特徴的である。現在の大倉宅の本棟造は、敷地内の屋敷林を使って新築が行われた。特に正面玄関の梁は12間もあり、家主も自慢の母屋である。

5-6 楡（にれ）　代々守る屋敷林

安曇野市三郷温

西側道路から望む甕宅の屋敷林

近年の開発により景観が変わりつつある楡集落

甕宅を南西から望む

楡は旧三郷村の北西部、黒沢川扇状地の扇端に位置している。楡の名の由来については、この地に楡の木が繁茂していたという説と、古来、住吉神社の神事に捧げる「贄（にえ）」が転じてニレとなり楡の字が宛てられたとする、両説が提起されている。

集落内には、楡遺跡群、西の段丘上には平成15年の発掘調査により平安時代の住居趾が多く見つかった三角原遺跡があり、先人たちが黒沢川の沢水を求め、この地で営みを始めたことがうかがえる。

住吉庄の中心集落

平安後期、ここに寄進地系荘園の住吉庄が開発された。平安末期には在地領主はおそらくこの地にあって権門勢家の平氏の勢力下にあったであろう。しかし、住吉庄は鎌倉初頭の『吾妻鏡』に「院御領」として見え、後白河法皇に寄進されたことが分かる（のち長講堂領）。源平の合戦で平氏が滅亡後、源頼朝により全国の平氏系の荘園は没収され（平家没官（もっかん）領）、戦功に応じて源氏の御家人に地頭職が割り振られた。住吉庄は平家領ではなかったが、東信の滋野氏一族の西牧氏が地頭となってここに進出し

春の北アルプスと甕宅

冬の北アルプスと甕宅

甕宅の門と前庭

屋敷林の手入れも行う甕宅のリンゴ用リフト

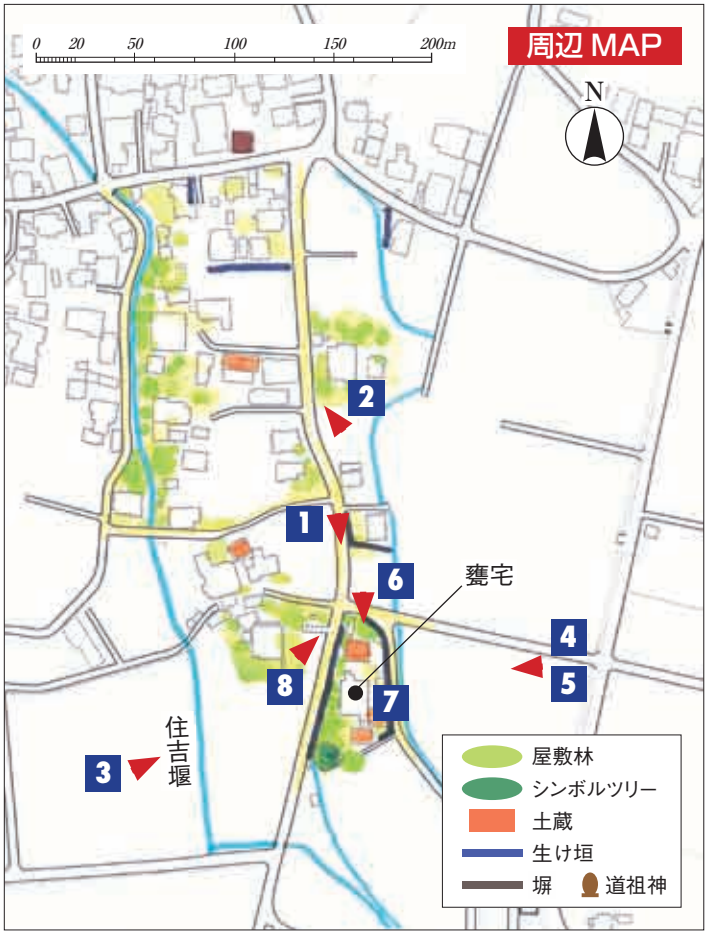
たものである。その住吉庄の鎮守が住吉神社であり、支配所が置かれたのが楡の集落であった。楡には「しょうじ」（庄司）という小字名が存在する。

甕宅の屋敷林

楡の南端に位置する甕宅には、手入れの行き届いた生け垣と寛永年間（1624 ～ 44）に植えられたという壮大なケヤキが見られる。屋敷林の樹種は、ヒノキ・スギ・マツなどが中心で、特に前庭のマツは当主が自ら剪定を行い、大切に維持されている。また、東側の農道からは、北アルプスと広大な田園を借景として甕宅の美しい屋敷林景観を望むことができる。

楡は、旧三郷村で最も多くの茅葺屋根の民家が集中している地域であるが、甕宅の母屋もそのうちの一軒である。幕末に建てられたという茅屋は、現在、鉄板で覆われているが、今なお安曇野らしい民家として残されているのは貴重である。

屋敷内には数棟の土蔵も見られ、終戦後は、離れとして地元の学校へ勤めている先生を下宿させていたこともあったという。



5-7 二木（ふたつぎ）　土佐守の森の屋敷林

安曇野市三郷明盛

二木宅裏の小路と屋敷林

二木分館から眺めた二木宅の屋敷林

二木土佐守屋敷跡

二木集落は、旧三郷村のほぼ中央に位置し、三郷中学校校庭や三柱神社境内から土師器が見つかっているので、古くから開発された地域であったことが知られる。室町時代以降に名が見える二木氏によって計画的に開発されたと考えられ、圃場整備前は条里型に区画された水田が見られた。

この二木氏は、南北朝に入って下伊那から中信へ勢力を移してきた信濃守護・小笠原氏の一族で、住吉庄の地頭職を幕府から与えられたため、一族の二木氏を地頭として送り込んだものである。これにはそれまで地頭であった西牧氏が反発し、信濃のほかの武将たちと組んで小笠原氏と応永７年（1400）に大塔合戦となった。しかし、その後二木氏と西牧氏は協力してこの地の開発を進めたようである。

永正～天正年間（1504～92）にかけては、二木豊後守（ぶんごのかみ）と弟の二木土佐守（とさのかみ）が二木郷に居館を置き、居館跡には標柱が立てられている。また、近世初頭の小笠原氏の転封には三男の藤左衛門がこの地に残り、四男の善左衛門が九州小倉に移って家老となっている。二木豊後守の二男の六右衛門は隣の境海道（さかげと）に屋

二木宅玄関前と庭園

堰の脇の河畔林

土蔵とケヤキ

沿道の屋敷林　ブロックの色違いは道路拡幅によるもの

敷を持った。

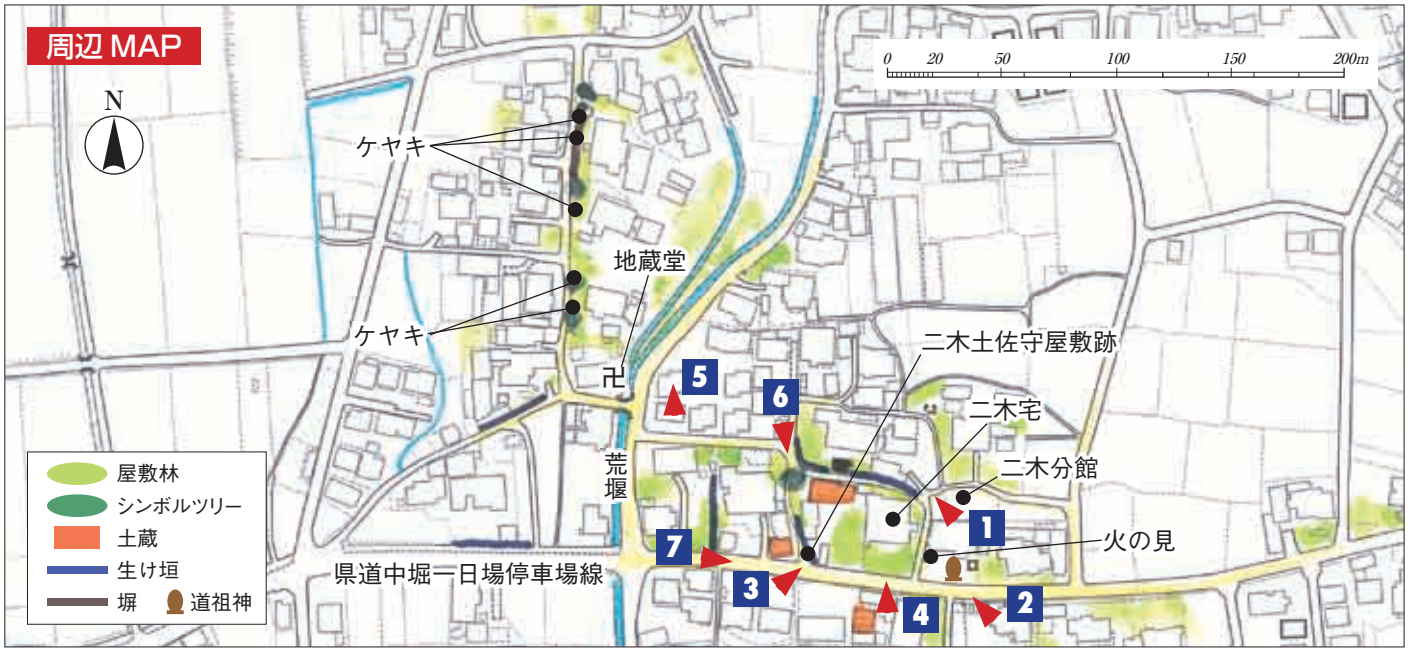
昭和29年（1954）三郷村が誕生して以後は、二木地区に三郷村役場や文化公園、体育館が建てられ、当地は文教・行政の中心地となった。

二木の建物群

二木集落の特徴を示す伝統的建造物は、本棟造の民家と土蔵である。特に本棟造は、集落の中心でもある二木分館（公民館）周辺に多く残されている。当地は、これらの古い住居と宅地開発による新しい住宅やアパートが混在しているのが特徴的である。

二木の屋敷林

安曇野市三郷総合支所から西へ走る県道の左右には、三郷の他地域にも多い小路が何本も伸びており、生け垣越しからスギやヒノキを中心とした屋敷林を眺むことができる。また、温堰（ぬる）沿いの地蔵堂付近には、スギを中心とした河畔林が植樹されているのが珍しい。



5-8 下長尾（しもながお）　大きなフジの木のある屋敷林

安曇野市三郷温

2軒でつくるフジの木のある屋敷林

中澤宅を東から見る

土塀のある小道

住吉庄の長尾郷の初見は、文明８年（1476）「下諏訪春秋両宮御造営帳」に「長尾上方」とある。その後の天正18年（1590）石川氏による検地（大閤検地）で長尾村が成立、その中の小村として存在した。江戸中期の享保13年（1728）長尾村は上・下二村に分村し、下長尾村となる。

下長尾の西ノ木戸は周辺に平安時代初期の栗ノ木下遺跡があって、黒沢川の自然流や湧水により早くから開発がみられた。中世には堀屋敷があったといわれ、代々庄屋職の家もあって、広大な屋敷に本棟造の母屋を中心に、土蔵や納屋などの建物が配置され、屋敷林の見事さに歴史を偲ばせる。

西ノ木戸を東西に、松本から長尾前を経て一日市場から上長尾、小倉へと続く古道が通っている。天保４年（1833）松本藩の若殿と姫様の一行が黒沢の滝や不動尊、室山への見物や参詣に通った道で、庄屋宅を休憩所として使用した記録が残されている。

松岡淳夫宅

大きなフジの木があり、自分の家では高いところにある花が咲いたことが分からず、近所の人から教

松岡宅を南から見る　敷地内の蔵は現在取り壊されている。

大きなケヤキの木は腐り伐採された。

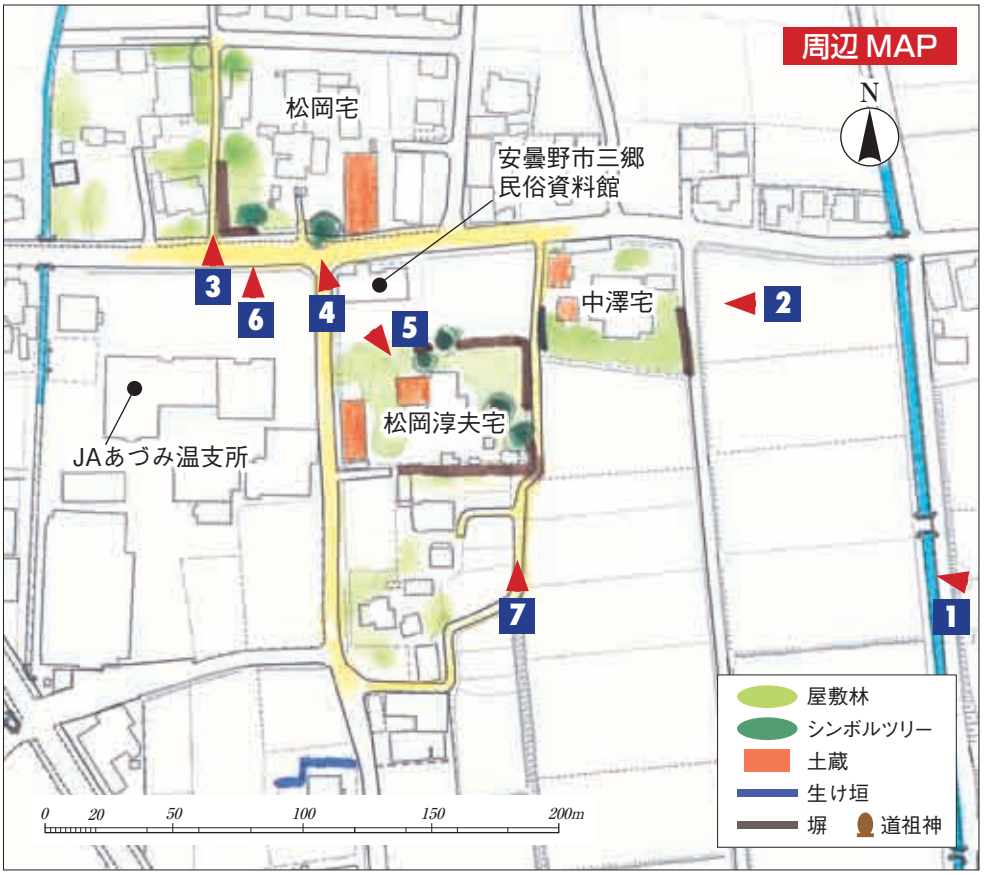
松岡宅南の道路の屋敷林

松岡宅のケヤキ

えてもらうという。むかし松本城主とお姫様が領内巡見の折に休憩に立ち寄ったと伝わる。北側には常緑樹、南側にケヤキの落葉樹が植えてあり、典型的な屋敷林配置の例をなす。

中澤宅

母屋は江戸後期の本棟造で、民家再生により全面改築した。美しく落ち着きのある前庭を持つ。



5-9 上長尾（かみながお）　播隆上人ゆかりの地の屋敷林

安曇野市三郷温

上長尾集落

播隆上人ゆかりの阿弥陀堂跡

長尾山平福寺の境内

塀を低くして庭を見せている家

上長尾集落は、黒沢川扇状地の段丘下で梓川扇状地の扇端付近に位置する。長尾の地名の起源は、梓川の上野から続く段丘崖の終末に立地する村、つまり「長い尾」の終わる位置にちなんで名づけられたといわれている。

近世には長尾村に属し、慶安４年（1651）に野沢村が分村し、享保13年（1728）には上・下長尾村に分村している。明治７年（1874）に野沢・上長尾・下長尾・楡・住吉の５か村で温村（ゆたか）が誕生した。

上長尾には、先人たちの歩みがうかがえるいくつかの文化財が残されている。

住吉庄の祈願寺であったとされる長尾山平福寺は、上長尾集落の西側に位置し、平安末期から鎌倉初期にかけての造像とされる木造聖観音立像（県宝）が残されている。このことから、長尾は住吉庄園開発の母村であったと考えられる。

また、槍ケ岳を開山した播隆上人が10か月滞在した阿弥陀堂跡も集落中心部に見られる。

上長尾の建築群

戦前は伝統的な木造建築が数多く残されていたが、

屋敷林を映し出す田植え前の田園

上長尾に残されている数少ない本棟造の民家

沿道の屋敷林

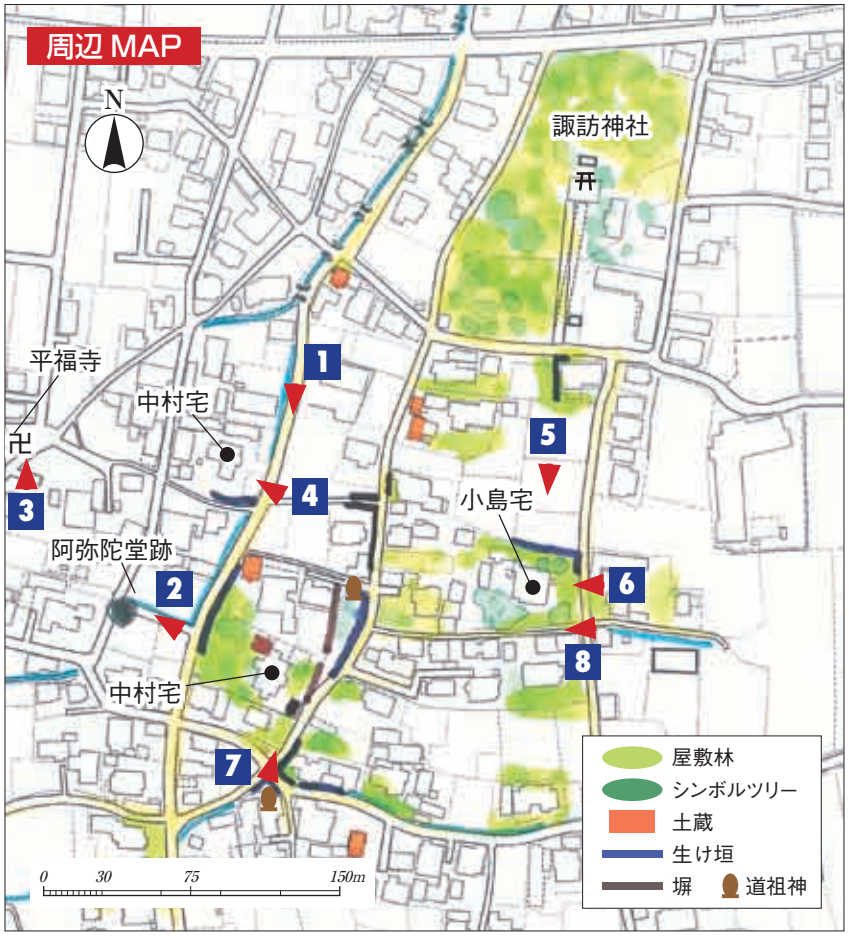
東西に伸びる小路

戦後多くの建物が建て替えられた。現在は本棟造の建物も数件残されている程度で、周辺地域の中でも伝統的建造物の減少が進む地域である。

上長尾の屋敷林

上長尾の屋敷林の樹種としては、イチイ・マツ・ヒノキなどが多く、これらの高木を庭に上手に取り込んでいる家が多い。中には庭の塀を低くして、道路側から庭や屋敷林を楽しめるような演出をしている家も見られる。

また上長尾には、各々の家の屋敷林や生け垣の間をぬって、東西に小路が何本も伸びていて、天気の良い日には、散策も楽しめそうな通りである。



5-10 野沢（のざわ）　レンガ造の蔵のある屋敷林

安曇野市三郷温

生け垣と屋敷林の続く道は梓川、上高地につながる

小林宅の西側はスギの防風林で囲まれている

屋敷林に囲まれた通り

野沢のいわれは、河岸段丘上（上野原）の本神沢が氾濫して巾下まで押し流し、川筋（野原の沢）ができたことによることが、「年譜雑記」（務台文書）に記されている。

慶安４年（1651）親村の長尾村より25軒で分村。中世開削の温堰（ぬるせぎ）・長尾堰の最上流に位置し、水利に恵まれて古くから開発の進んだ水田地帯である。

明治10年代から大正・昭和にかけて、蚕種製造家が殷賑（いんしん）を極め、農村経済の発展を見た。蚕種を買い付けに仲買人が、県内外から多数来村。その接待に小料理屋・旅宿・飲み屋があって賑わったという。祭りの囃子に三味線が入る独特な演奏はその名残である。

野沢地区内に本棟造の建物が16棟現存している。かつての蚕種家の経済力によるもので、ほかにも住宅と蚕室を兼ねた家、大きな二階建ての蚕室や土蔵も多く、近在には見られないレンガ造の蔵（文庫蔵）も３棟現存している。

野沢の屋敷林

建物の西側にスギの屋敷林があって西風を防いで

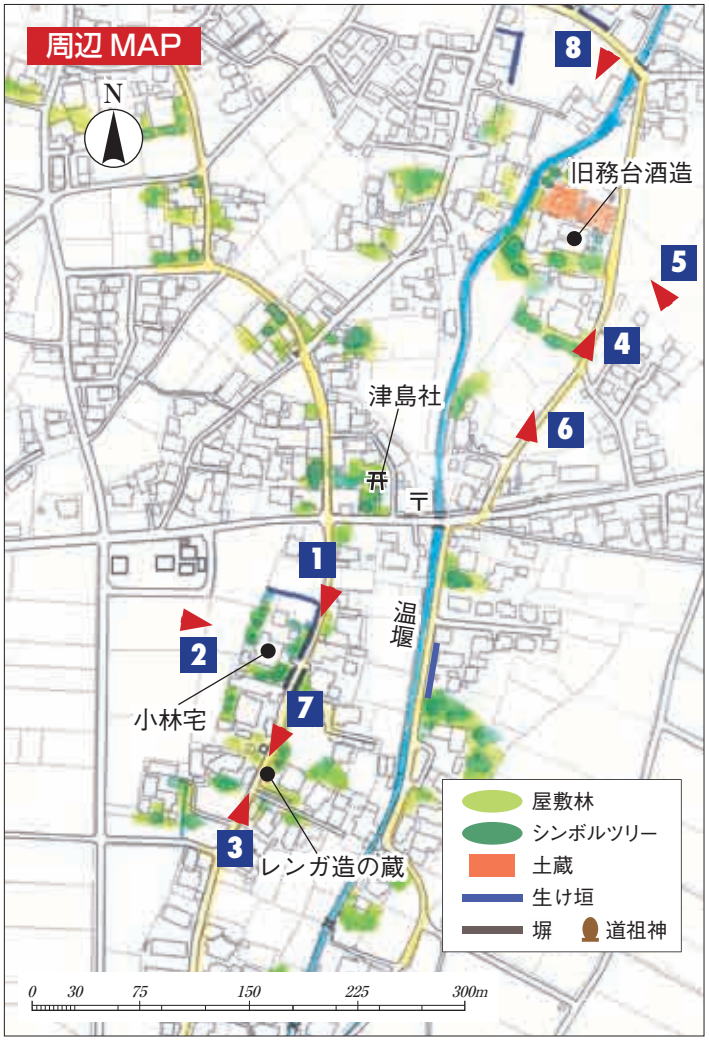
旧務台酒造の土蔵と屋敷林

東から見る旧務台酒造

務台宅２軒でつくる屋敷林

レンガ造の蔵と門の対比が面白い

野沢の集落を流れる温堰



いる。野沢では「黒沢おろし」という西からの強風があって、ほとんどの家で西側に屋敷林が見られる。この一角には３棟の本棟造があり、赤レンガの蔵もある。道をはさんだ向かい側には、自然石の玉石の石垣が、イチイの生け垣とマッチし、この通りの雰囲気をかもし出している。

小林宅の本棟造

小林宅の母屋は明治年代に移築された本棟造で、一部三階となっている。平成20年に改修工事が行われ、かつての雀踊りが復活された。

5-11 七日市場（なのかいちば）　堰がめぐる屋敷林

安曇野市三郷明盛

布山宅の門かぶりの松と屋敷林

本棟造の棟に上がる雀踊り

堰は敷地をまわり、かつては粉挽用の水車があった

住吉庄十八郷のうちの二木郷に属し、中世には三斎市の市場があったことに由来する。住吉庄の地頭となった西牧氏により、庄野堰が開削されるまでは乏水地帯で、横沢堰による原初開発が先行していた。

地内には古地名の神ノ木・野々宮や、宿駅に関わる立石のほかに、孤田・元屋敷・若宮・町張り・長田、寺院に関係するトッチュウ坊・油田・伽監田などの中世地名が見られる。

寛文３年（1663）の検地の際に二木村より分村。水田率80％と地味が良く、長尾組中最高であった。地区内の梓川渡河点の「長尾前」は小倉から上長尾、七日市場を経て梓川を渡り、高松から新橋経由で松本に通じていた。また住吉から中萱、真々部を経て長尾前で合流、野沢から藤ノ木を経て長尾前へと貫く主要な道は、各村々の郷蔵から年貢米を運んだ道であり往来も多く、松本街道として重要な道であった。

地区内の「藤ノ木」は古堰の横沢堰水系の末流に立地し、中世前期に成立した古集落である。「馬口」の地字が残されていて、宿駅的な交通路としての所在を示している。

布山宅の北庭と文書蔵

三澤宅の屋敷林

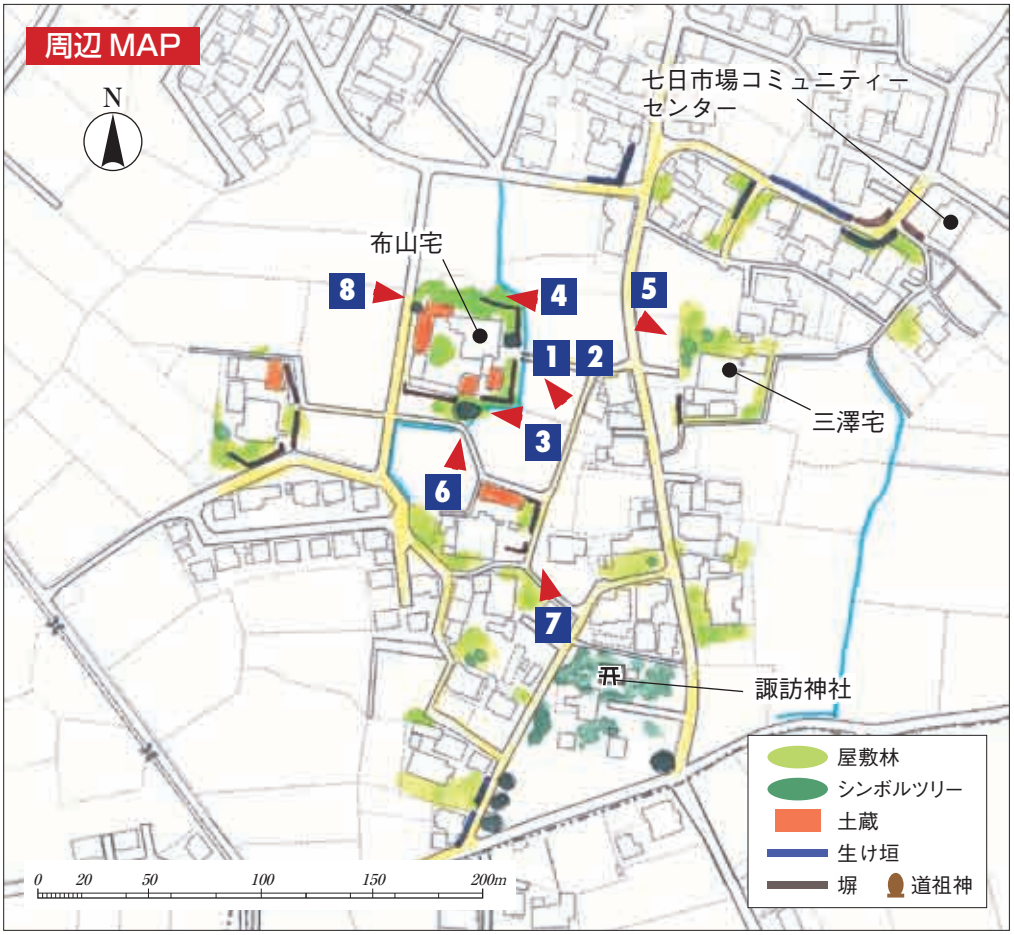
布山宅の屋敷林を南から見る　右は大きなトチノキ

民家のたたずまいと屋敷林

七日市場の屋敷林

諏訪神社周辺に比較的大きな屋敷が散在している。布山宅は特に大きな屋敷を構成している。本棟造の家が多く、古民家と屋敷林と塀が美しい風景をつくっている。敷地が散在し孤立した屋敷林を構成しているのが七日市場の特徴である。

大きなクヌギの木



5-12 藤ノ木（ふじのき）　二軒でつくる屋敷林

安曇野市三郷明盛

南側から望む等々力宅の屋敷林

南側道路から小道をとおして等々力信宅を望む

藤ノ木は、旧三郷村の南側、旧梓川村との境に位置している。藤ノ木には長尾藤ノ木と七日市場藤ノ木があり、地名の由来はともに富士浅間神社が祀られていたことにあるという。慶安年間（1648～52）にはすでに開発されていたが、江戸時代を通じて分村することはなかった。

明治29年（1896）旧明盛村において村内を７つの区に分けた際、第一区が藤ノ木であったといわれている。旧梓川村横沢地区と隣接していることから、横沢地区と現在も一緒に道祖神祭りなどを行っている。

等々力宅２軒の屋敷林

屋敷林で囲まれている奥の本家の等々力信宅は、旧上鳥羽村から出たという。手前の等々力宅は、等々力信家の分家で、２軒で屋敷林を形成している。当時は、この等々力家の屋敷内に立派なフジの木があったことから、この地が「藤ノ木」と呼ばれる所以ともいわれている。

本家の等々力信宅の本棟造は築後200年以上を経過し、戦後屋根を葺き替えるなどの大規模改修を

本棟造の等々力信宅

等々力信宅の納屋で古式の板倉

樹陰にこもれ陽がもれる小道

等々力信宅の庭園

行ったが、その際、屋根材として屋敷内のクリの木を使ったという。

現在、屋敷内の主な樹種は、スギやヒノキが中心であるが、当時はクリやアカマツも植えられていた。特にマツは、家の繁盛を示す尊い樹種ともいわれ、大切にされてきた。先々代は、屋敷内のクリの木を切って舎弟の家の土台に使ったり、燃料としても使うなど、様々な活用をしてきたという。

今でもスギの葉や枝などは、風呂の焚きつけとして使っている。家主によれば、クリの木はほとんどを伐採してしまったが、当時はクリの木の上にツリーハウスをつくって昼寝をすることもあったという。また、当時は所有者自身が高木の枝打ちを行っていたようだが、現在は数年に１回、庭師に依頼するようになっている。

今では、キハダやチョウセンゴヨウマツ、コシアブラなどの山菜を屋敷内に植えて、季節の味覚を楽しんでいる。

三郷の天然記念物

（旧三郷村天然記念物７件のうち）

旧役場前のヒマラヤスギ（ヒマラヤシーダ）

一日市場出身の白澤保美林学博士が、明治40年代に母校の旧温明（おんめい）小学校の校門両脇にユリノキとともに植えたものである。目通り3.12㍍、樹高25㍍。松本市あがたの森（旧制松本高等学校）校庭の同種よりも古いとされている。

インドヒマラヤの原産で、ヨーロッパやアメリカでは広く庭園に植樹されている。秋に雄花が開花すると花粉で地面は淡黄褐色になる。雌花は2～3年目に10㌢もある球果になる。

旧役場前のユリノキ（ハンテンボク）
英名：チューリップツリー

ヒマラヤスギと同時期に、白澤博士により記念に植えられた。再三の道路拡幅や下水道工事などの度に根元が痛めつけられた。目通り3.10㍍、樹高25㍍で貫禄を保っている。木の名前は、６月ころ咲く花はユリに似て、葉は印半纏（しるしばんてん）のようだということによる。北アメリカ原産で白澤博士がドイツ留学の帰途、アメリカから持ち帰って植えたものである。この時の５本のうち、１本は上野の東京国立博物館の前庭に残っている。現在、日本に残されているユリノキでは、上野の木とともに最も古い木とされる。　　『三郷村誌Ⅱ　第一巻自然編』より